夕焼け通信 1346号　2022.3.21
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）92

木幡智恵美

職場復帰（2）

娘が職場復帰してそう経たない頃、合気道部同期Mの訃報が届いた。前の年の同窓会がコロナの蔓延で中止になった。中止の連絡後しばらく経って、Mから電話を受ける。下血が続き、病院で診てもらったところ、診断がつかず、半年ほどあちこちを回って、最後に大腸がんと診断されたという。ひどく悔しそうだった。「診断がついたのだから、治療ができるよ」と言うしかなかった。秋口、メールで「旅に病んで　夢は枯野をかけめぐる」の解釈を問うてきた。芭蕉の辞世の句に、妙に胸がざわつき、すぐに電話をしたが、応答がない。そこで、「旅で病を得たけど、病の床にありながらも、心の裡では行きたいところをかけめぐるという前向きの気持ちではないかな」と返信した。ほどなく電話があり、「軽い脳梗塞で入院してて、病室では電話出れんのよ」とのこと。後で仲間に聞くと、その時、すでに脳転移していたらしい。一月下旬から広島の同期からメールや電話が度々入るが、コロナ禍で見舞いにも行けない。家族で葬儀を終えたそうだとの知らせを受け取った時は唖然とした。還暦を機に、毎年同窓会をするようになったのに、仲間が一人減ってしまった。二年前、松江での同窓会で、我が家に帽子を忘れて帰ったのが最後の思い出になってしまった。

そんな時、ショートステイのケアマネさんから連絡が入った。血中酸素濃度が最近低いとのこと。夫と相談し、病院に連絡を取ってもらい、週明けに受診することにした。夕方、夫が洗濯物を取りに行った際、病院に渡すようにと記録用紙を持たされていた。見ると、確かに血中濃度が今週に入って低くなっている。そして、驚いたことに、毎日かなりの体液が漏れるのに、体重が退院してから十三キロ増え、病気入院前より重くなっていた。

週明け、ショートステイに行き、福祉タクシーで病院に向かう。一層白くなった義母の顔は退院時よりふっくらしたのに表情が乏しい。「雄ちゃんは元気かいね」の家族を問う言葉もない。家に連れて帰らないことを責められているように思えてならない。夫が声を掛けても、返答はぽつり。しばらくして診察室に呼ばれ、主治医は顔を見るなり、「かなりの貧血ですね」と言われた。そして、「対処療法でやってきたので、色々支障が出て来たかもしれません。検査しますので、入院しましょう」と続けた。

がらがら橋日記

宮森健次

桜懺悔

薄明かりの中を走っていたら、ふっと甘い香りがした。沈丁花が咲き始めたのだろう。坂道が上りから下りになって、弾んだ息が落ち着くあたりの家に植わっていて、季節限定ながら給水所ならぬ給香所になっている。このところ意欲が減退気味だったので、エネルギーを補給させてもらえそうだ。

これから次々と花々が咲き始める。坂道のてっぺんには早咲きの桜があって、毎年一本だけ極端に早い。それが散り始めると、朝酌川の土手の桜並木が一斉に咲く。それが終わると、坂道を下った辺りの八重桜が咲き誇る。これから当分、花見ランニングだ。

桜にもいろんな種類があって、わずかな季節の変化で開花のバトンパスをするなんてことを気づかせてくれたのは、小林秀雄だ。高校時代、現代文の試験によく出るが難しくて何が言いたいのかわからない、と敬意とも揶揄ともつかない微妙な評価を仲間内でしていた人だが、講演録となるとうってかわってわかりやすく、非常におもしろい。大学生になったころに『本居宣長』が出版されて、小林秀雄の代表作として評判だったので、買いはしたが読んでもさっぱりわからなかった。卒業して教員になりかけのころ、講演の録音がカセットテープで発売された。こっちは聞いて夢中になった。続編もいくつか出たがすべて買って、テープが伸びてしまうまで何度も何度も聞いた。

中で桜にまつわる話をしている。親の膨大な資産をすべて桜に注ぎ込んだある人物のことを話しつつ、我々が桜と聞いて真っ先に思い浮かべるのは染井吉野であること、それは幕末から明治にかけて品種改良されたものであり、古歌で唱われた桜とは全く別物であることをちょっと高めのべらんめえ調と言えなくもない勢いで語るのである。栽培しやすいのに目を付けた政府が学校に植えることを熱心に推奨したのだと。

「あんなものはね、植木屋と文部省が結託して広めた俗悪なる花なんだよ。」

本は読めもしないのに、講演を聞いて心酔していたぼくは、教室で三・四年生の子どもたちに語った。

「葉っぱと花が同時に出るのが山桜、あれこそほんとうの桜なんだ。染井吉野なんてあんなものはな…。」

表層部分だけだが小林秀雄が憑依しているので口調などもそのままに。話した後、三年生のTが興奮した面持ちで言った。

「先生、ソメイヨシノなんて、ぼくね、あんな花もうきれいと思いませんよ。」

桜土手を歩きながら、子どもたちにとてもすまないことをした、と毎春思う。どうかTが染井吉野も山桜も等しく愛する大人に成長していますように。

30代フリーター　やあ、ジイさん。ロシアがウクライナを侵略した最大の理由は反体制派を抑え込めないプーチンの統治権力の危機にある、と三上治が指摘している（「テント日誌」2月25日）。戦争はナショナリズムを呼び起こし、一時的に統治権力を強めることができるからだ、と。

年金生活者　戦争が大きな代償を強いることをわかっていながら、プーチンがそれを選んだのは、そうしないと自分の命が危なくなると考えていたと推察するほかない。自らの築いた独裁体制が盤石のものではなく、むしろ揺らぎだしており、放置すれば崩壊して自分が処刑される恐れさえあると考えているのではないか。それを阻止するには、独裁体制のねじを締め直す必要があり、そのために戦争によってナショナリズムをあおり、自分への支持を一気に高めようとしたと考えられる。

30代　プーチンの独裁は習近平の独裁と並ぶ世界の2大独裁体制だ。

年金　習の独裁も盤石とは言えないが、プーチンの独裁よりはまだ安定している。その理由は世界第2位のGDPにある。それが国民に経済的な自由を供給し、政治的な不自由を埋め合わせている。中国国民がいま何がなんでも独裁を排除したいと考えていないと推測できる理由がそこにある。

ロシアの経済力は中国にはるか及ばない。国民に中国ほどの経済的自由を与えることができない。中国ほどの政治的不自由を国民に強いれば、不満が爆発しかねないので、限られた政治的な自由を許容している。それが反体制派を出現させ、反戦デモを誘う結果となっている。プーチンは中国がよく使っていると思われる手口、すなわちそれが存在しないかのように封じ込めるやり方ができず、暗殺や警察による弾圧で臨むしかない。

30代　プーチンはソ連崩壊を「20世紀最大の地政学的大惨事」と呼んだと伝えられている。

年金　もっとうまくやっていれば「大惨事」は防げたのに、と言いたがっているように思える。つまり「崩壊」は失敗だったが、ソ連そのものが失敗だったのではないというメッセージだ。

だから、彼は「もっとうまくやって」ロシアをソ連のような帝国として再興したいと考え、「うまくやる」ための修正を施した。それが統制経済から市場経済への移行だ。だが、強権的、独裁的な統治権力のあり方はソ連のそれを引き継いだ。つまりソ連が崩壊した最大の要因を引き継いだ。プーチン独裁が同じ失敗の危機をはらむのは必然だったと言える。

人間も社会も同じ失敗を繰り返しやすい。今度はうまくやろう、と同じことをやってしまうからだ。失敗の理由は「うまくやらなかった」ことにあるのではなく、「やった」ことそれ自体にあるのに、それを認めようとしない。ソ連崩壊に続くロシアの崩壊が始まるかもしれない。

30代　この戦争を満州事変になぞらえる見方がある。ともに傀儡政権の樹立を狙った侵略戦争である点で共通している。

年金　違いは今のロシアが当時の日本より苦しいだろうということだ。

満州事変当時の大日本帝国は国際社会の反発を買ったが、今のロシアのように経済制裁を受けることはなかった。また反戦デモの行われたロシアと違って、日本国民は関東軍を積極的に支持した。だからこそ、アメリカに敗北するまで約15年もの間、侵略戦争を続けることができた。

現在のロシアはそんな長期にわたる戦争に耐えることはできない。国際社会からは大規模な制裁を受け、国内では国民が政府不信を募らせつつあるからだ。ATMの前に、ルーブルではなく外貨を引き出そうとする人の長い列ができたことがそれを物語っている。

満州事変当時と現在の世界との大きな違いは、資本主義の高度化とともに、国家から個人、企業（市場）、そして国連など国家間システムへの権力の分散が進んだことにある。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業（市場）への、そして資本のグローバル化が国家間システムへの権力の分散を駆動した。いまプーチン政権を苦しめているのは、分散した権力を手にして国家への発言力を増したこれら3者からの圧力だ。個人はデモやルーブル不信でプーチンの足もとを脅かし、企業はロシアでの事業を停止し、国家間システムは経済制裁を強化している。

30代　プーチンの侵略戦争は、万が一にも日本が他国から侵略されたらどうするのかという問いをあらためて突きつけた。

年金　どこかの元大統領の口ぐせを真似て言えば、あらゆる選択肢がテーブルの上にあると言うほかない。武器になりそうなものをかき集め、ひとりであるいはだれかと一緒に侵略軍に抵抗する。さっさと降参して侵略者に面従腹背する。自衛隊と米軍に期待して事態の好転を待つ。どこでもいいから少しでも安全そうなところへ逃げる。ガンジーのような非暴力・不服従を貫く……。

今はまだテーブルの上にある様々な選択肢は、侵略が始まってしまえば自由に選べなくなるだろう。そのときの状況と国民それぞれの状態によってどれかを選択することを否応なく強いられるだろう。それがどれになるか、私自身を含め予測するのは難しい。

ニュース日記　824

中村　礼治

2度目の崩壊の始まりか